

## 【投稿論文】

### 東日本大震災後の文学研究と福島での詩の言葉

——故郷を「失った」詩人、齋藤和子・根本昌幸・みうらひろこに着眼して——

加島正浩

#### はじめに——和合亮一の詩と震災後の福島の分断

東日本大震災直後に注目を浴びた詩人のひとりに和合亮一がいる。和合は1968年福島県生まれで、福島県に在住する詩人であり高校の国語教員である。1998年に第1詩集『AFTER』で第4回中原中也賞、2006年に『地球頭脳詩篇』で第47回晩翠賞を受賞するなど、現代詩の前線で活躍する詩人であり、福島県にて被災した後には、Twitter を利用して2011年3月16日からインターネット上に投稿した詩を集めた『詩の礫』（徳間書店、2011年6月）、福島で亡くなった人々を悼むことを目的とした『詩ノ黙礼』（新潮社、2011年6月）、被災者へのインタビューと書きおろしの詩で構成された『詩の邂逅』（朝日新聞出版、2011年6月）の3冊を同時刊行するなど、震災後の福島を表現する代表的な詩人として、注目を浴びた。ただしTwitterで詩を発信する和合の試みは、藤井貞和のように「多くの方を励ましていたことを確認するとともに（中略）新しいメディアによる声だと私には思えた」<sup>1</sup>と肯定的に向きもあるが、城戸朱理が「ある部分だけを取り出すと戦争協力詩のように見えかねない。（中略）ほんとうのところ、福島に留まるのではなく、避難するのが一番いいわけです」と述べ、その発言を受けた岸田将幸が「自分がほんとうにいいことだと思ってやっても、それが最悪の結果をもたらすというのはよくあることです。「福島で生きる。福島を生きる」と言ったときに、それが残酷な結果をもたらすというところの意味は、城戸さんのおっしゃられた、ほんとうは避難したほうがいいという事実です」<sup>2</sup>とするなど、和合の Twitter 上の詩が、福島に留まるように人々を誘導するように読めることから「戦争協力詩」のようにみえるという批判もある。

<sup>1</sup> 藤井貞和「福島の表現する詩人たち」『〈ケアの思想〉の錨を——3.11、ポスト・フクシマ〈核災社会〉へ』（ナカニシヤ出版、2014年4月）、149頁

<sup>2</sup> 井坂洋子・城戸朱理・岸田将幸「鼎談討議 詩が引き受けるべき未来——二〇一一年展望」（『現代詩手帖』2011年12月）、51頁。

事実、「福島は私たちです。私たちは福島です。避難するみなさん、身を切る辛さで故郷を離れていくみなさん。必ず戻ってきて下さい。福島を失っちゃいけない。東北を失っちゃいけない。(後略)」<sup>3</sup>、「今が苦しいけれど、福島に戻ってきて下さい。」<sup>4</sup>など、福島から「避難」した人たちに戻ってきてほしいとする直接の呼びかけが『詩の礫』には多々見られる。また、「私たちはここに生まれた。福島を私たちが信じなければ、誰が信じる。」<sup>5</sup>「故郷を捨てちゃいけない。」<sup>6</sup>「福島を捨てるな。」<sup>7</sup>「最後の家とせよ。」<sup>8</sup>という一連の詩の礫は、福島に留まるにせよ戻ってくるにせよ、最期を福島で迎えることが福島を「捨て」ないことであり、福島を「信じる」ことであると読み、他にも「愛しい人。大切なあなた。僕はあなたの髪を撫でよう。たくさんの人がこの世を去った。たくさんの人が故郷を捨てた。たくさんの人が今も苦しんでいる。大切なあなた。僕はあなたの髪を撫でているから、涙が出てくるのだ。涙が出てくるのだ。」<sup>9</sup>、「あなたにとって故郷とは、どのようなものですか。私は故郷を捨てません。故郷は私の全てです。」<sup>10</sup>など「故郷を捨てる」という表現がみえるが、被曝量には健康に影響を与えるか否かをわける「しきい値」が存在せず、「ICRPの勧告に従って日本政府が決定した年間二〇ミリシーベルトという「被曝限度量」以下であったとしても、被曝量はできるだけ低く抑えられるべき」<sup>11</sup>という考えを踏まえたとき、たとえ日本政府が決定した「被曝限度量」以下であっても福島を離れる判断をした人を「故郷を捨てた」人と表現することには、福島に留まった人々の思いのひとつ<sup>12</sup>ではあ

<sup>3</sup> 2011年3月20日 0:20、和合亮一『詩の礫』、61頁

<sup>4</sup> 2011年3月20日 23:47、和合亮一『詩の礫』、79頁

<sup>5</sup> 2011年3月22日 23:34、和合亮一『詩の礫』、101頁

<sup>6</sup> 2011年3月22日 23:38、和合亮一『詩の礫』、102頁

<sup>7</sup> 2011年3月22日 23:41、和合亮一『詩の礫』、102頁

<sup>8</sup> 2011年3月22日 23:42、和合亮一『詩の礫』、102頁

<sup>9</sup> 2011年3月20日 22:16、和合亮一『詩の礫』、68頁

<sup>10</sup> 2011年3月16日 4:44、和合亮一『詩の礫』、12頁

<sup>11</sup> 佐藤嘉幸・田口卓臣『脱原発の哲学』(人文書院、2016年2月)、110頁

<sup>12</sup> 原発事故以前から南相馬市に居住する佐々木孝は、原発直後に妻を預けていたグループホームのスタッフの大半が避難したことを「これは立派な職場放棄。老人たちを残して自分の身の安全をはかったというわけだ」、「もちろん病院や施設のスタッフの中には、津波被害でわが家を失い、家族を失った人もいよう。そのスタッフが残された家族と一緒に避難するのは当然の行為である。私が言ったのは、わが家の場合のように家屋倒壊を免れ、電気や水道も確保された状況の中で、すでに述べたような「不信」あるいは「風評」に狼狽して、病院や老人たちを見捨てた人たちのことを言ったのである」佐々木孝『原発禍を生きる』(論創社、2011年8月、13、16頁)と述べる。震災直後の何を信じればよいのかかわからない混乱状態で避難した人々を批判することはで

ろうが、評価することはできない。和合は『詩の礫』の続編である『詩の礫 起承転転』（徳間書店、2013年3月）にて、「あなたは 福島を あきらめてはいない なぜなら 福島は あなたを あきらめてはいない」<sup>13</sup>「あなたは私です 私はあなたです」<sup>14</sup>と記すが、震災以後は福島に居住しつづける人、離れる選択をした人、避難指示により離れざるをえなくなった人など、生活する場所を選択せざるをえないところにそれぞれが追い込まれ、それぞれがそれぞれの判断で選択を下したのであり、「私」の選択と「あなた」の選択が一致しない、「私があなたではない」状況が生活の基盤に関わる場所に現れたのが震災後の福島であると考えなければならないのではないだろうか。その状況で「私は故郷を捨てません」と書かれる詩は、福島から離れる選択をした人、故郷を離れて生活をせざるをえなかった人の思いを顧みておらず、「私はあなたです」とする和合の思いとは裏腹に（もちろんその責任は和合にというよりは、日本政府と東京電力に直接は起因するものであるが）分断を招くものでもある。

## 1. 問題設定・詩人紹介

本稿では、震災後も福島に在住しているが、日本政府からの避難指示を受け、故郷とは異なる場所で生活を営まざるをえなくなった詩人、あるいは故郷に戻れなくなった詩人を扱い、「故郷を捨て」ざるをえなかった背後にあった思いや、故郷を離れたその後の生活で生じる感情や故郷への思いを明らかにすると同時に、震災後の福島で詩人が詩を書くことで試みていることを明らかにする。そのうえでその詩人の表現を、大手文芸誌掲載の小説や有名作家のテクストを中心に分析する現状の文学研究が取りこぼしてきたことを問題視し、福島に在住しながら詩を書いている詩人に光を当てる必要性を提起することを目的とする。

取り上げる詩人は齋藤和子・根本昌幸・みうらひろこ（根本洋子）の3名である。以下扱う詩人の来歴を簡単に紹介する。

齋藤 和子（さいとう かずこ）は1942年福島県浪江町に生まれ、1965年東北薬科大学を卒業。その後、浪江高校などで教鞭をとり、震災の前年から浪江高校同窓会会長を務める。震災直後は着の身着のままで避難する。2017年3月の卒業式の後に行われた休校式でも同窓会会長としてスピーチを行い、「あ

---

きないが、居住地域にとどまった人が見捨てられたように感じたのも事実であろう。

<sup>13</sup> 2012年3月15日 23:32:08、和合亮一『詩の礫 起承転転』、18頁

<sup>14</sup> 2012年3月16日 00:02:57、和合亮一『詩の礫 起承転転』、23頁

る日突然、当たり前前の生活がなくなる事が無いよう願う」と、原発事故により母校を失う怒りや哀しみを表現した<sup>15</sup>。震災後の詩集に第5詩集『望郷の祈り』（花神社、2018年7月）がある。福島県現代詩人会理事、クレマチスの会などに所属。

根本 昌幸（ねもと まさゆき）は1946年福島県浪江町に生まれ、原発事故以前まで浪江町に在住。原発事故後、自宅周辺は黒いフレコンバッグの仮置き場となり、現在は相馬市に在住<sup>16</sup>。1965年、詩集『道』を出版後、詩誌「ぺん」、「北国」、「蒼海」などを創刊し、「雨」で第13回白鳥省吾賞優秀賞を受賞<sup>17</sup>するなど、抒情派詩人として活躍するが、原発事故後の避難生活を経て刊行した9冊目の詩集となる『<sup>あらの</sup>荒野に立ちて——わが浪江町』（コールサック社、2014年2月）より社会派の側面を見せるようになる<sup>18</sup>。震災後に刊行したその他の詩集に『昆虫の家』（コールサック社、2017年6月）、『桜の季節』（竹林館、2019年7月）があり、上記2冊の帯文は柳美里が執筆している。福島県現代詩人会・詩誌「卓」などに所属。

みうら ひろこは1942年、中国・山西省に生まれ、5歳の時に両親とともに福島市に引き揚げ、原発事故までは夫の根本昌幸とともに浪江町に暮らし、原発事故後は相馬市に移る<sup>19</sup>。福島県立福島商業高校在学時に演劇に熱中し、19歳のときに最初の詩集をガリ版刷りにて刊行、現在までに11冊の詩集を出版<sup>20</sup>。『豹』で第59回福島県文学賞正賞、「千年桜」にて第20回白鳥省吾賞最優秀賞など受賞歴多数。震災後の詩集に第10詩集『渚の午後——ふくしま浜通りから』（コールサック社、2015年9月）、第11詩集『ふらここの涙——九年目のふくしま浜通り』（コールサック社、2020年3月）がある。第10詩集の帯文は柳美里が執筆。また本名の根本洋子の名前で「南相馬短歌会あんだんて」に参加し、短歌・エッセイを寄稿している。福島現代詩人会、詩誌「卓」などに所属。根

<sup>15</sup> 「【72カ月目の浪江町はいま】在校生無き最後の、卒業式、途絶える伝統。母校奪った原発事故への怒り。「我が学び舎を返して」——浪江高校と津島校で休校式」『民の声新聞』2017年3月2日、<http://taminokoeshimbun.blog.fc2.com/blog-entry-126.html>、2020年8月19日参照

<sup>16</sup> 鈴木比佐雄「【解説】昆虫の愛と哀しみと恨みを受感する」根本昌幸『昆虫の家』、132頁

<sup>17</sup> 「根本昌幸略歴」『昆虫の家』、142-143頁

<sup>18</sup> 「大波小波 被災者の歩く道」『東京新聞』、2014年4月17日夕刊7面

<sup>19</sup> 鈴木比佐雄「海から呼ばれる人びとの悲しみと再生を」みうらひろこ『渚の午後』、120頁

<sup>20</sup> 「ぐるっと東日本・母校をたずねる：福島県立福島商業高 土日もなく演劇に熱中 詩人・みうらひろこさん」『毎日新聞』東京版、2020年5月13日、20頁

本昌幸とともにNHK スペシャル「“原発避難”7日間の記録——福島で何が起きていたのか」(2016年3月5日(土)放送)に出演。以上である。

## 2. 残る「言葉」、継承されがたい「ころ」——齋藤和子『望郷の祈り』

「故郷を捨て」ざるをえないということは、そこで培われてきた「文化」や「精神性」が消えることである。その点を鋭敏に示すのが齋藤和子『望郷の祈り』である。齋藤はまず、浜通りで生涯を送ったふたりの女性の延長に自らを位置づける。

「害虫を潰して」<sup>21</sup>

線量 1.6 $\mu$ Sv/h  
蔓延る草の病気と害虫  
生殖に暇ない重なったテントウムシは  
指で次々に潰す  
シラカバのカミキリムシは  
揺り落として長靴で踏んづける  
アブラムシを指で扱ぐと  
緑のアブラがギトギト伝って  
指の間に流れる  
ケムシを鎌で叩いて埋める  
ダンゴムシに農薬を振り掛ける  
アリの巣を水攻めにする  
ざっくり鍬を入れると  
ミミズが半分になって現れる  
イモムシが転がり出る

吉野せいのど根性が背中を押す  
おてんと様に尻向けて  
黙々働いて来た相馬の女たち  
新開ゆり子の反骨魂ぞよ  
指がぶっとく荒れることなど  
構うものか

---

<sup>21</sup> 齋藤和子「害虫を潰して」『望郷の祈り』、34-36 頁

草木のいのちを護るために  
わたしの精神を護るために  
天敵のない放射能をぶっ飛ばして  
害虫は潰す

優しささえあればどんな時も  
生きていける筈の信条は捨てよう  
感傷は要らない  
せいバツパのようにこの時を  
すばっと切って生きられるか  
2012年7月の空の下  
優しさを捨て  
優しさに敏感になって  
3・11を斬り  
潰した命に合掌する

吉野せいは、1899年に現在のいわき市小名浜に生まれ、最初は小学校教師となり山村暮鳥などの文人とも交流がありその才能を認められていた。22歳のときに、詩人であり社会活動家でもあった三野混沌と結婚するが、夫混沌が三男であったがために実家の土地を相続できず、小作開拓の生活に入らざるをえず、子供を病死させるなど常に貧困と闘う生活となり、文筆からは離れていく<sup>22</sup>。しかし、75歳の時に書いた『涙をたらした神』が、第6回大宅壮一ノンフィクション賞と第15回田村俊子賞の2つの文学賞を受賞したことで、一躍有名となり、1977年に78歳で亡くなるものの、翌年文学業績を記念し、吉野せい賞が設立されるなど、浜通りを代表する文筆家のひとりである。

新開ゆり子は、1923年に現在の南相馬市の農家に生まれ、幼少期には親族に騙され奪われた土地を取り戻す母の闘いをみて育つ。18歳で農業技術指導員の新開真一と結婚。詩や短歌を創る夫の影響を受け、さらに書棚にあった宮沢賢治や夫の仕事を通じて農業への関心を持ち、1950年頃に、児童文学者協会福島支部の同人誌『メルヘン』に参加。『メルヘン』廃刊後は詩作に転じ、自費出版で刊行した詩集『炎』は1971年に第14回農民文学賞を受賞。受賞を機

---

<sup>22</sup> 菊地キヨ子「吉野せいの文学——「涙をたらした神」を中心に」『文学・語学』147号、1995年8月

に、児童文学第1作目となる『ひよどり山の尾根が燃える』(牧書店、1973年)を出版。50歳になってから「幼児期に母から繰り返し聞いた故郷の移住民の歴史や、移住民だった先祖のことを涙ながらに語る姑の思い」を結晶化するように、凶作に苦しみそれを乗り越える農民の姿を、児童文学として伝え始める。後年には新開原作の作品を許諾を得ずに上演した原町市に対し著作権侵害を訴え、その間夫と息子を亡くし、自らも病を患ったが、譲らなかった<sup>23</sup>。

両人物とも浜通りで農業に従事しながら文筆に励んだ女性であり、それぞれに闘いながら生き抜いてきた女性でもある。齋藤は貧困や自らの権利を守るために闘った両女性の精神性を同じ土地で受け継いでいくものとして自らを位置づける。もちろん齋藤は、「線量 1.6  $\mu$  Sv/h」と示される「天敵のない放射能」とも闘わなければならない。しかし齋藤が行う闘いも害虫を潰すという「相馬の女たち」が貧困や凶作を生き延びるために「蔓延る草の病気と害虫」と闘ってきたあり方と同じであり、その害虫に目に見えない放射能が付着している点のみが異なる。だからこそ齋藤にとっては「草木のいのちを護る」ことに自らの「精神を護る」闘いが「害虫を潰す」点で重なり、草木と自らを護るために「優しさを捨て」る吉野「せいバツパのよう」な「相馬の女たち」のあり方に自らを連ねようとするのである。しかし故郷が失われるときには、かつて同じ場所で苦勞した女性の精神を継承して自らを鼓舞していくこの詩のようなあり方が、同時に消滅するのである。

「思い出のことは禁句」<sup>24</sup>

(前略)

着の身着のまま川内村に逃げて  
印西市から足立区のお寺に辿り着く  
携帯から送信された入学式は  
だぶだぶの洋服でピースをするが  
あの子はいつもとどこかが違う  
卒園式は8月の郡山市  
思い出は禁句

<sup>23</sup> 榎村幸子「福島の子供文学者31 新開ゆり子(しんかい ゆりこ)」『福島県郷土資料情報 No.46』2006年3月、<http://www.library.fks.ed.jp/ippan/jiken/Kj/Kj31.htm>、2020年8月19日参照

<sup>24</sup> 齋藤和子「思い出のことは禁句」『望郷の祈り』、46-48 頁

何も聞かない  
翌年つくばに転校した2年生は  
「東京から来ました」と  
自己紹介したから  
「福島」とは言わずに済んだ

秘密を持つのは大人になった証拠  
孫の心を覗いてはいけない  
「わたしのふるさととはつくばよ」  
父親の故郷に来て  
あの子がそう言ったのだから  
セイヨウタンポポが通学路に増殖している  
桜通り  
美し過ぎる桜も禁句だ

車のナンバーが  
いつかつくばになっている

福島から他県へと避難した人々が、偏見のもとにいわれのない差別を受けていたことは多々指摘されている<sup>25</sup>ことであるが、「翌年つくばに転校した2年生」は福島から来たとは「言わずに済んだ」ため、おそらく避難を理由としたいじめを受けることはなかったと思われる。それを受けて孫は「わたしのふるさととはつくばよ」と福島出身であることを「秘密」にする。孫は福島を「秘密」とすることと引き換えに「大人になり、つくばで生きることを決めたのである。「大人になる」過程で、「子供」とされる部分を自ら抑圧して「社会化」されるように、孫は「ふるさととはつくば」と言うことで「社会」に適合し、「大人になった」のである。そのとき「子供」＝福島は抑圧される。それは、相馬の女たちが紡いできた精神性を積極的に継承する態度が抑圧されかねないということである。だからこそ齋藤は「孫たちの正月」<sup>26</sup>という詩において、「代わり番こにおしとやかに／お茶とお菓子を戴く／女たちの正月／お正月様の習わしや／語り継がれたおはなしが／

<sup>25</sup> たとえば、岩本太郎「施設の利用拒否、学校でのいじめ 偏見に苦しむ福島県民」『週刊金曜日』2011年9月9日号、29頁

<sup>26</sup> 齋藤和子「孫たちの正月」『望郷の祈り』、50-51 頁



まもなく消える」と「語り継がれた」ものが「消える」ことを正確に理解したうえで、「あれもこれも 気が急ぐが／伝えきれない思いは秘めて／ゆったりと教えよう／言葉でなくて／所作のこころを」と、「言葉ではなく」語り継がれてきた「所作のこころを」残そうとする。詩人は詩で「言葉」を残すことはできるが、その土地に流れてきた精神性や「所作のこころ」までを詩で継承することは安易ではない。故郷が失われても、「言葉」は残るが、その土地の「こころ」は継承されえないかもしれない。齋藤はその点を鋭敏に示し、「言葉でなくて」、「所作のこころ」が継承されえないことを危惧するのである。

### 3. 「失なわれた」故郷を書くこと

#### ——根本昌幸『荒野に立ちて』・みうらひろこ『渚の午後』

齋藤和子は故郷を失うことは、その土地に根付いた精神性や文化を失うことだと示していたが、詩が書かれることで「言葉」は残るように、その故郷を書き残すことは、故郷のみならず、そこで生きた者たちの精神性や文化を残そうとする試みであるとまず把握できるだろう。根本昌幸も「詩集を出すように話があった時、私は決心をした。今、記録としてこの詩集を残さなければ、いずれは忘れ去られてしまうであろう」と<sup>27</sup>と述べており、「記録」として詩集の意義があることは疑いようがない。ただ詩集の意義が「記録」のみであるのなら、他メディアや他の表現ジャンルにおいても可能であり、むしろ映像メディアの方が優れている部分もあるだろう。「失われた」故郷を詩で表現することには、他にどのような意義があるのか。根本昌幸『荒野に立ちて』と、みうらひろこ『渚の午後』を通して考えてみたい。根本は『荒野に立ちて』では、望まずして出ていかざるを得なくなった「ふるさと」についての詩を多く書いている。「あの思い出はすべて／夢幻であったのか。／ここから先／行きたくとも行けない／どうしても行けない／美しかった／私の町がある」<sup>28</sup>、「荒野に立ちて／わが古里の町を見た。／ここにかつては／私たちの／町があったのだ。／楽しい暮らしがあったのだ。／緑の豊かな町／美しい川が流れていた町。／小鳥のさえずりがあって／目覚めて／それから／仕事へ出掛けた。／あれはすべて夢幻であったのか」<sup>29</sup>など、「美しかった私の町」での生活が急に奪われたことを「夢幻であったのか」という言葉で示しているが、重要なのは、その「美しかった私の町」がいまどこに

<sup>27</sup> 根本昌幸『荒野に立ちて』、157 頁

<sup>28</sup> 根本昌幸「ここから先」『荒野に立ちて』、32-33 頁

<sup>29</sup> 根本昌幸「荒野に立ちて」『荒野に立ちて』、34-35 頁

あるのかである。

「ふるさとは」<sup>30</sup>

どうしよう こうしよう  
ああしょう こまったな  
こまってばかりで どうしよう  
どうしようもなくで どうしよう  
これからさきも あすからも  
あとなんねんさきも さきまでも

すこしすぎれば わすれるさ  
にんげんなんて そんなもの  
のどもとすぎれば あつさだって  
すぐにわすれて しまうもの  
ふるさとおわれた ものたちが  
おんねんのように わすれないだけ  
まぶたのなかの ふるさとは  
いつおもってみても うつくしい  
うつくしいのは ほんとうのこと  
あのやま あのかわ あのうみも  
あののはらだって おがわまで  
みんながみんな なつかしい  
(中略)

どうしよう どうしようといっても  
しかたがないさ  
みんながみんな おなじなんだから  
おんなじことの くりかえし  
それにしたって ふるさとは  
こころのなかから きえないさ

よごれはてても なくなったとて

---

<sup>30</sup> 根本昌幸「ふるさとは」『荒野に立ちて』、70-73 頁

いつもいつでも ふるさとは  
こころのなかに いきている

こころのなかに いきている

大杉重男は、文学が東日本大震災をはじめとするカタストロフィを書くことについて以下のように述べている。

文学は真実とどのような関係を持つのか。この問いに対する一つの古典的な答えは、文学は言葉による「ミメシス」であるということである。「ミメシス」とは真実の模倣であるが、模倣であるが故に真実ではない。真実ではないこと、虚構であることが文学の本質にはある。(中略)従って、カタストロフィを文学として書くことは、カタストロフィの真実を破壊し、否認することにつながる。<sup>31</sup>

書くということはあくまでも、書く対象の模倣に過ぎず、対象そのものを書くということとはできない。そのため、書かれたものは常に「真実」ではない。大杉の指摘する通り、表象は常に代理表象に過ぎない。根本の「ふるさと」がいかにつくしいものであるかを言語で具体的に描写しても、根本の実際のふるさとである浪江を映像に収めても、それは根本の中にある「ふるさと」の表象の域を出ず、原発事故前の浪江町を「記録」する目的であれば、その真偽性や立場性が問題になるだろう。「文学」も「記録」も事後的に構築される「虚構」であり、その点で大杉が指摘するように「真実」ではない。しかし、原発事故によって奪われたうつくしい「ふるさと」がかつてあり、それを「ほんとうのこと」とあるとする根本の詩は、読み手にその言葉を「真実」として受け止めることを求めているのではないだろうか。

ある詩を読むとき、書き手が何を意図し何を示そうとしているかを理解するように努めるのが読者の読み方のひとつであろう。では根本のこの詩を読むとき、原発「事故」によってふるさとから何が失われたと、あるいは原発「事故」前のふるさとがどのような町であったと書き手の根本が捉えているのかを読み取る読み方が適切であるといえるだろうか。たとえば、根本が表現するうつくしい「ふ

<sup>31</sup> 大杉重男「カタストロフィの後に書くことについて」西山雄二編『カタストロフィと人文学』（勁草書房、2014年9月）、292-293 頁

るさと」は、根本の「まぶたのなか」や「こころのなか」にしかない。しかしその「ふるさと」は、「いつおもってみても うつくし」く、「うごけなく」なってしまったとしても「こころのなかから きえない」と書かれるものである。目覚めて、それから仕事へ行けるような場所としての「ふるさと」を奪われたことは「おんねんのように わすれない」が、あるいはそれゆえに、彼の「こころのなか」にしかない「ふるさと」は「いつおもってみても うつくし」く、それは「夢幻」ではなく、「いつもいつでも」「こころのなかに いきている」「ほんとうのこと」なのである。というように解釈しても、根本が「うつくしいのは ほんとうのこと」とわざわざ記した意味は理解できないのではないか。上記の解釈では、この一行がなかったとしても、大意は変わらない。根本は「ふるさと」を「うつくしい」と感じるのは自分の主観ではなく、「ほんとうのこと」なのだと読者に理解させるために、この一行を置いたのではないか。「虚構」でも根本の目に映る「ふるさと」がうつくしいのでもなく、それは「真実」としてあることを詩は示そうとしているのではないか。もちろん、そう考えることで根本の詩を基に、浪江を追われた人々は、失われていたふるさとを美しいと感じていたなどと一般化する記述を試みようとしているのではない。根本の詩を基に浪江の人々へと主語を拡大するのは、解釈する側の暴力である。ただ「虚構」でもなく「主観」でもなく、解釈を行わずただ「真実」としてその言葉を受け止めることを求める詩のあり方が、震災後の福島において、倫理的にではなく、詩の言葉の次元においてなされていることをまずは確認したい。

そのうえで、根本同様失ったふるさとを表現するみうらひろこの詩を取り上げたい。みうらも根本同様に「あの美しかったふる里よ／我らの家よ、庭よ、いぐねよ」<sup>32</sup>／このごろ頃に荒廃が進んできたと／同郷の人達が言っていた／悲しくなるだけだから／もう自宅へは行きたくない／古里を追われた私達の心の中に／美しいまま哀しいまま悔しいままの／ふる里浪江よ、双葉郡よ」<sup>33</sup>と記しており、心の中に美しいままでふるさとがあることが示されるが、根本の詩と比すと「哀しさ」が強調されていることも読み取れる。別の詩で「美しかった思い出を／哀しみの中に偲んでゆくことだけなのだ」<sup>34</sup>とも述べているみうらであるため、「哀しさ」が表現されることが、震災後の彼女の詩の特徴のひとつともいえるが、その「哀しさ」を乗り越えていくために、みうらは以下のような詩も記している。

<sup>32</sup> 「いぐね」には、「家の周りに風よけに植えている樹木林」と、みうらにより注がつけられている

<sup>33</sup> みうらひろこ「ふるさとーガラケー」『渚の午後』、30-33 頁

<sup>34</sup> みうらひろこ「蛇行する明日」『渚の午後』、44-47 頁

「省略させてはならない」<sup>35</sup>

悲しんだり

嘆いてばかりいても明日は来ない

私達は模索しつづけよう

何か希望を見つけよう

これから先の人生に

自分自身に問うてみよう

新しい地域や家族の歴史を

紡いでゆくために出来ることを

東京電力は東電と呼ばれ

原子力発電所は原発と略称され

私達の地域に君臨しつづけていた

あとで知ったことだが

万が一の事故に備えて

立地町への対応マニュアルは作っていたが

隣接町村へのマニュアルは無かったという

安心・安全への過剰な自信

この恐るべき慢心、何という驕り

私達浪江町民達を

住民以下と切り捨て

省略してしまっていたのだ

私達は省略されてはならない

私達は切り捨てられてはならない

逃げ惑ったこの怒りと不安と悲しみ

もっと沢山の悲惨さを

セシウム134と137が付着した

---

<sup>35</sup> みうらひろこ「省略させてはならない」『渚の午後』、86－89 頁

それら瓦礫の山が更地になるまで  
人類には無用のものを排除して  
愛や絆や温もりや  
地球人として大切なこと  
世界中から寄せられた真心を  
同じ思いをしている人に  
分け与えねばならない

私達の心に今でも突き刺っている  
哀しい眼をして訴えかけてきた  
置き去りにしてきた家畜やペット達

目を閉じれば甦がえる  
穏やかで幸せだった暮らしの日々  
それらを省略させてはならない  
切り捨ててはならない  
私達の新しい明日のため  
サイレントマジョリティよ  
叫ぼうではないか 今こそ

悲しんでばかりの毎日では何も前に進まないため、みうらは新しい地域や家族の歴史のために行える希望を見出そうとする。そこで東電と省略される東京電力が、原発の立地地域には避難マニュアルを作成していたが、隣接する町村への対応マニュアルは作成していなかったことを知り、「私達浪江町民」が「省略」されていたと憤る。当然そこで「省略」されていたのは、浪江町の住民の「穏やかで幸せだった暮らしの日々」であり、みうらはそれを「省略させてはならない」とし、今こそ叫ぼうではないかと述べる。では、ここでみうらが叫ぼうとしていることは何なのであろうか。

まず、脱／反原発運動へと接続されていく主張であるとみなすことができるだろう。福島県居住者にとって脱／反原発を唱えることは容易ではないため、もちろんそのなかで声をあげたものとしてみうらの詩を読む方向にも意義はある。地域社会学者の山下祐介は、福島県在住者による脱／反原発運動の難しさを以下のように指摘している。

脱／反原発運動に対しても、多くの人々は一線を画すことになる。原発避難者は避難を体験したのだから、みな脱原発の意識をもっているはずだと、運動側からしばしば誤解されている。しかし事故後も原発を軸にシステムは変わらず存続しつづけており、その中で暮らす以上、人々はむしろ声をあげづらい立場にいる。脱原発に親和性があるのは、自主避難者や、ごく一部の強制避難者のみだ。多くの避難者は盛り上がる運動を前に、しばしば隠れるように避難をつづけている。<sup>36</sup>

原発を軸としたシステムが震災以後も変わらないため、そのシステム内で暮らす福島県民の多くは、脱／反原発の考えを持っていたとしても、その声を挙げづらい。ただし、みうらひろこは、浪江町から強制的に避難させられ、生活を変えられてしまったため、他の地域の住民よりも脱／反原発への思いが強く、それが詩に結集し、運動に接続されうのような呼びかけにつながっているのだという解釈も可能であろう。しかしここでは、もう少し丁寧に詩を解釈してみたい。

みうらは原発事故が起こり、「逃げ惑ったこの怒りと不安と悲しみ」以上の悲惨さが、「セシウム134と137が付着した」、「瓦礫の山が更地になるまで」生まれ続けると表現している。そこに自らや浪江町の住民に「世界中から寄せられた真心」を「同じ思いをしている人に分け与えねばならない」とつづけている。みうらのこの詩は、自らが原発「事故」後に逃げ惑ったときの実感と、その時に差し伸べられた支援、そして身近にあるセシウムの付着した瓦礫という、生活しているなかで感じたこと、経験したこと、目にしたことによって組み立てられている。みうらは原発「事故」後の風景を身近に感じながら、「人類には無用のもの」として原発やセシウムの付着した瓦礫を捉えており、その点が重要なのである。小菅信子は、ある種の反原発運動に関して以下のような嫌悪感を示している。

反原発を掲げる平和運動が思い描く、反核平和の聖地としてのフクシマは存在しない。「フクシマ」という表記は他者による表象である。ましてや、フクシマと表記しつつ、福島に生活する人びとの加害者性を指摘する議論は、反原発の思想というよりも、大衆運動としての反原発の権勢に追従し、福島に生きる人びとを排除し抑圧するものに他ならない。<sup>37</sup>

<sup>36</sup> 山下祐介『東北発の震災論——周辺から広域システムを考える』（ちくま新書、2013年1月）、176－177頁

<sup>37</sup> 小菅信子『放射能とナショナリズム』（彩流社、2014年3月）、100頁

反原発を掲げる平和運動のなかにはそもそも反原発というイデオロギーがあり、原発「事故」があった福島を、反原発の思想を広めるための反核平和の聖地「フクシマ」とみなして、運動を拡げていく動きがあったと小菅は述べ、そのような運動のあり方を「福島に生きる人々を排除し抑圧するもの」とであると批判している。確かに原発を廃絶することを主目的にするならば「原発反対」などのスローガンが前面に出るであろうし、そのスローガンの意味を深めるために、福島の悲惨な生活を見出し「フクシマ」と表象する運動もあるのだろう。しかし、みうらの詩は、反原発という思想が先行しているのではない。「穏やかで幸せだった暮らしの日々」を失うことで原発「事故」が何をもたらすのかを身をもって実感し、家畜やペットが訴えかけてくる「哀しい眼」の訴えを無視することもできず、原発が不要であるという結論にみうらは辿り着き、そこで「私達は省略されてはならない」という言葉を紡いでいるのである。反原発運動を目的とする人にとっての福島は原発の被害を被った土地「フクシマ」であるのかもしれないが、みうらにとって福島は「ふるさと」であり「私達」の土地なのである。そして「私達」と「私達」の土地を切り捨ててものであるからこそ、原発は不要だと述べているのである。

ここには小菅が述べるような反原発を掲げる運動とは異なった言葉がある。原発が不要であることは言うまでもなく、廃絶に向けた動きが起こることは望ましいことであるが、山下や小菅が述べるように反原発を主張する運動が、福島に縁を持つ人の思いと重ならないこともある。そのなかで、原発立地者によって「私達浪江町民達」が切り捨てられていたことから紡がれた「私達は省略されてはならない」という言葉は、みうらの生活のなかから出てきた言葉であり、運動とは別角度から原発の不要を言語化しているといえる。反原発を唱える言葉は、運動からのみ発せられるわけではないのである。

#### 4. 震災後の文学研究が取りこぼしているもの

根本は書かれた言葉を「真実」として読むことを求める詩を紡ぎ、みうらは自らの生活実感から原発を不要とする地点に辿り着く詩を記している。彼らは生活の「真実」を詩で記しているのであり、原発を不要と考えるのも特定の思想を有していたからではなく、生活するうえで得た「真実」であるからだ。つまり、重要なのは福島で生活する者からの視点で記されているということである。その重要性は、たとえば震災後の林京子の以下のような発言を参照するとき、明らかになる。



私はこれまで小説の中で、原発のことには全く触れませんでした。(中略) 私は被爆者という立場で八月九日を書く。原発反対というと政治色がついてしまうので、そこに触れないように意識して書いてきました。(中略) 原子爆弾の怖さを、被爆者たちの悲惨さを書いていけば、(中略) 当然、原爆＝原発として考えられるだろうと。同じ核物質ですからね。被爆国なので、原爆、核に対するその程度の知識は持っているだろうと。ところが、そこまで広がるものを、ほとんどの人が持っていなかった<sup>38</sup>

原爆の悲惨さを書けば、原発にも考えが及ぶと考えたと林は述べるが、原発を原爆と切り離して考えさせるためにアメリカが用いた戦略が「原子力平和利用」政策であり<sup>39</sup>、その内実と日本社会への浸透を林ほどの作家が気づいていないとは考えにくく、発言のすべてを鵜呑みにすることはできないように思うが、重要なのは「被爆者という立場で八月九日を書く」、「原発反対」と政治色が「つく」という発言である。原発「反対」と政治色が「つく」と述べる林が想定し忌避した「政治色」とは、核＝原発に賛成／反対するという二項対立化した単純な選択肢の一方に、自らとそのテキストが振り分けられうることを述べたものと解することができるだろう。であるならば「被爆者という立場で八月九日を書く」ことに「政治色」がつくとは意識しない林の前提には「被爆者」という立場が、政治政策上の単純な二項対立にからは逸脱する「余剰」としてみなされていることが見て取れる。「被爆者たちの悲惨さ」と林が述べるように、原爆を身に受けた者の悲惨はその人の数だけ存在し、たとえ示される悲惨さがある話型に集約されるようにみえたとしても、被爆した者がどのような生活を被爆前に営み、被爆の結果何を奪われ、どう生活を再建しようとしたのかを丁寧にたどるとき、そこには必ず話型にも政治的な二項対立にも集約しえない「余剰」が生じる。根本とみうらに話を戻せば、その「余剰」こそが、根本に詩の言葉を「真実」として読むことを求めさせ、みうらに生活実感から原発を不要とする言葉を紡がせたといえ、紡がれた根本とみうらの言葉自体も政治的な二項対立に回収し得ない「余剰」を構築しているといえる。

<sup>38</sup> 林京子×黒古一夫「若い人たちへの希望——ナガサキからフクシマへ」黒古一夫編『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ——「核」時代を考える』(勉誠出版、2011年12月)、3-4 頁

<sup>39</sup> その点を端的にまとめ説明したものとしては、田中利幸・カズニック、ピーター『原発とヒロシマ——「原子力平和利用」の真相』(岩波書店、2011年10月)などがある。

先に引用した大杉重男は、「原発推進派と原発反対派の言説は鏡で互いを照らすように相似して」おり、木村朗子の述べる「震災後文学」は「反原発」という「単純な選択肢に押し込めら」れたものでしかなく、「反原発」が「正しい」ことであるため、文学としての強度を持たなくても、そこにおいては正当化されるという見方を示しており<sup>40</sup>、確かに「反原発」という思考のみに着眼すれば、それはすべて「単純な選択肢に押し込めら」れた同じものであるに違いない。しかし、その単純な「政治色」を帯びた二項対立の選択肢に還元しえない「余剰」を読み取る姿勢がなくては、結局何が書かれたとしてもテキストを単純な選択肢に迫りやるだけに終わるだろう。だからこそ、林は原発反対とは書かなかったのだともいえよう。何が書かれるか／書かれたかも重要であるが、何を読み取っていくのかというテキストに向き合う姿勢を構築していくことも震災後の文学研究には求められているのではないか。

大杉は震災の表象不可能性と、「真実と虚構」、「原発推進派と原発反対派」などの二項対立を前提に震災後の文学を眺めており、少なくとも震災後の「文学」を肯定的に読み解く姿勢をみせてはいない。また木村朗子の『震災後文学』論も大手文芸誌掲載作か有名作家の書きおろし小説、あるいは岡田利規など演劇界の中心で活躍する劇作家の戯曲や日本語訳のある外国語小説などしか分析しておらず、震災後の「文学」を肯定的に読むかどうかの違いはあれ、「被災地」での表現については両者とも関心を払わない。木村は「震災後文学」を「震災という出来事を追い詰め、考え抜こうとした作品である」<sup>41</sup>と述べるが、そこで構築される「震災後という出来事」は、被災者の「被災後」を度外視することによって成立している。つまり大杉にしろ木村にしろ東日本大震災後の「文学」としてふたりがみなすのは、中央＝東京で存在を認められた有名な作家による表現であり、そこから「震災後」という立ち位置は形成できても「被災後」というパースペクティブを形成することはできない。確かに原発「事故」を伴った東日本大震災は日本国内のみならず、ドイツが脱原発へと指針を変更するなど海外にも影響を与えており「震災後」という見方から種々の問題を分析することは必要である。しかしそれは「被災後」を生きる人々の表現を軽んじてよいことをまったく意味せず、仮に「文学」がそれらの表現を周縁化するのであれば、中央＝東京の利権のために、地方＝福島を周縁化し、犠牲を強いた原発のシステムと極めて類似した構造をなぞることになる。そのとき、「文学研究」はみうらが述べるよ

<sup>40</sup> 注31に同じ、282頁

<sup>41</sup> 木村朗子『震災後文学論——あたらしい日本文学のために』（青土社、2013年11月）、236頁

うに、そこに住む生活者の生を「省略」しているのである。みうらが「慢心」、「驕り」と糾弾し、「省略されてはならない」と叫ぶその先に「文学研究」もあることを認めたうえで、生活者の表現を丁寧にみていく必要があるといえるだろう。

## おわりに

本稿は、齋藤和子・根本昌幸・みうらひろこという 3 人の詩人を扱い、原発「事故」で故郷を失うことは、故郷の精神性や文化、所作も失うことであることを述べ、福島在住の詩人の詩を分析することは、政治的な二項対立に回収し得ない生活者の思いを浮上させることであることを、そしてそのような生活者の思いをこれまでの震災後の文学研究は周縁化してきたことを明らかにした。そのうえで最後に、冒頭で述べた和合亮一の詩が福島県に住む人々を分断しているという問題に立ち返りたい。

和合の Twitter 上の詩の特徴は、福島＝故郷を捨ててはいけないという呼びかけがひとつの特徴であったが、もうひとつの特徴が「あなた」への呼びかけである。加えてその「あなた」とつながろうとする詩も散見される。

あなたは たった一人では 本当に か弱い 本当に 悲しい この世界は  
荒野は あなた 一人では あまりにも 広すぎる 残酷すぎる だから  
私と 手をつなぎませんか そうして 生きて いきませんか 私もまた か  
弱くて 悲しい だからいつも 手探りしています<sup>42</sup>

あなた 大切なあなた 私は もっと 福島の風を知りたいと思う 福島の空  
を 川を 海を 人を 命を 魂を そして もう少し先だけれど 確かに 息  
づいている 春の芽吹きを そして震災から 何も 変わっていない この  
福島の日々を もっと 知りたいと 願うのです あなたと ここに生きて<sup>43</sup>

私もか弱く悲しいし、この世界は一人では残酷すぎるから、私と手をつなぎませんかとする和合の詩は、これだけを取り出してみれば被災者の孤独な心情が明瞭に出ている詩として読めるが、その詩の前には「何も 変わっていない この 福島の日々を もっと 知りたいと 願うのです あなたと ここに生きて」という詩がつぶやかれている。その詩とあわせ考えると、震災以前と変わって

<sup>42</sup> 2013 年 2 月 13 日 22:07:38、和合亮一『詩の礫 起承転転』徳間書店、231 頁

<sup>43</sup> 2013 年 2 月 13 日 22:05:50、注 42 に同じ

いない福島を生きようとする「あなた」とつながりたいとする詩のように読めてしまう。被災の孤独な心情が背景にあるとはいえ、ここでつながりたい「あなた」の峻別が起こってしまっている。さらに和合は、「これだけは はっきりしているあなたと 私には はっきりと 震災がある」<sup>44</sup>とも記し、震災に関心がない「あなた」も自身の関心からはじいている。

上記の詩から読み取れるのは、和合の関心を起点に関心を共有できる「あなた」とのつながりを求める心情である。そのため震災時から大きく変わった福島を生きざるをえなかった齋藤や根本やみうらなどの詩人は和合の関心からははずれてしまう。震災後の福島を語る詩人としては和合亮一が注目される機会が多いが、和合亮一のみで福島の詩を語ることが不十分なのは明らかである。

本稿末尾に、震災後に福島県に在住する詩人が刊行した詩集のリストを付したが、論者が現在調べた限りでも、和合の詩集も含め29人の詩人により71冊の詩集が刊行されている<sup>45</sup>。これらの詩集に関しては、全くとってよいほど研究が進んでいない。大手文芸誌や有名作家のテキストを細かく分析する作業も必要ではあるが、一方で手付かずのままに放置されている福島で刊行された詩集の数をみていると、原発「事故」以後に中央と周縁の関係性と中央による搾取の問題が指摘されたにもかかわらず、文学研究においてはやはり中央＝東京を中心とする構図が温存されていると言わざるを得ない。詩集のみならず、福島をはじめ東北を中心に発表された文学テキストを研究の俎上に挙げていくと同時に<sup>46</sup>、そのような文学研究の「制度」自体を問い直すような姿勢が研究者には求められているといえるだろう。

<sup>44</sup> 2012年9月20日 22:47:19、注42に同じ、173頁

<sup>45</sup> もちろん現在は福島県外に住んでいるが、古里が福島であり「ふるさと」を失ったと感じる詩人・詩集を含めれば、数はそれ以上のものとなる。例えば塩野とみ子『桃を食べる』（土曜美術社、2012年8月）、小島力『わが涙滂々——原発にふるさとを追われて』（西田書店、2013年5月）など

<sup>46</sup> 原発「事故」の影響は広範に及んでいるため、福島県のみを分析の対象にするだけでは、原発「事故」の「被災」を取りこぼすことになる。代表的なものが、いわゆる「自主避難」といわれる区域外避難者の問題である。区域外避難者の問題を取りこぼすとき、文学研究の領域に絞っても、たとえば幼子の被曝を恐れて東京から京都へと避難した詩人の中村純や、仙台から避難した俵万智や大口玲子などの歌人を分析の埒外へと置いてしまう。福島の実態を丁寧に見ていくことも重要であるが、原発「事故」による「被災」を福島県内に限定して考えないことも同様に重要である。

表 震災後、福島県在住者によって刊行された詩集リスト（加島正浩作成）

著者名	詩集名	出版社	出版年	著者住所
安部一美	夕暮れ時になると	コールサック社	2015 年 11 月	郡山市
阿部正栄	がれきに書いたらくがき	砂子屋書房	2014 年 7 月	西白河郡矢吹町
荒尾駿介	安達太良のおおい空——3.11 の記録	山猫軒書房	2013 年 4 月	二本松市
井戸川茂	彩雲	創英社／三省堂書店	2013 年 11 月	不明
内池和子	漂流する秋	自費出版	2012 年 6 月	伊達郡国見町
及川俊哉	えみしのくにごたり	土曜美術社出版販売	2018 年 2 月	福島市
粥塚伯正	婚姻	自費出版	2019 年 8 月	いわき市
木村孝夫	冬の薔薇	竹林館	2011 年 7 月	いわき市
木村孝夫	ふくしまという舟にのって	竹林館	2013 年 12 月	
木村孝夫	桜螢——ふくしまの連呼する声	コールサック社	2015 年 9 月	
木村孝夫	夢の壺	土曜美術社出版販売	2016 年 11 月	
木村孝夫	私は考える人でありたい——140 字の言葉たち	しろねこ社	2018 年 8 月	
木村孝夫	六号線——140 文字と+&の世界	しろねこ社	2019 年 3 月	
木村孝夫	福島への涙	らんか社	2020 年 6 月	
木戸多美子	メイリオ	思潮社	2013 年 11 月	不明
齋藤和子	望郷の祈り	花神社	2018 年 7 月	南相馬市
齋藤貢	汝は、塵なれば	思潮社	2013 年 10 月	いわき市
齋藤貢	夕焼け売り	思潮社	2018 年 10 月	
斎藤久夫	零年の肖像	いりの舎	2013 年 5 月	
斎藤久夫	回廊 B	鳥の声社	2019 年 4 月	
斎藤久夫	野焼きの後に	鳥の声社	2020 年 7 月	
佐藤紫華子	原発難民	自費出版	2011 年 7 月	富岡→いわき市
佐藤紫華子	原発難民のそれから	自費出版	2011 年 12 月	
佐藤紫華子	原発難民の詩	朝日新聞出版	2012 年 7 月	
松棠らら	らら、ら！	自費出版	2014 年 11 月	不明
関久雄 写真：山本宗補	なじよすべ	彩流社	2019 年 3 月	二本松市
高橋静恵	梅の切り株	コールサック社	2016 年 7 月	郡山市
竹林征人	海獣Vol. 5	文思社	2018 年 12 月	いわき市
長久保鐘多	二十一世紀のエチカ	文思社	2016 年 7 月	いわき市
青天目起江	緑の涅槃図	コールサック社	2014 年 3 月	いわき市
二階堂晃子	悲しみの向こうに——故郷・双葉町を奪われて	コールサック社	2013 年 3 月	福島市
二階堂晃子	音たてて幸せがくるように	コールサック社	2016 年 4 月	
二階堂晃子	見えない百の物語	土曜美術社出版販売	2018 年 7 月	
根本昌幸	荒野に立ちて——わが浪江町	コールサック社	2014 年 2 月	浪江町→相馬市
根本昌幸	昆虫の家	コールサック社	2017 年 6 月	
根本昌幸	桜の季節	竹林館	2019 年 7 月	
芳賀稔幸	広野原まで——もう止まらなくなった原発	コールサック社	2012 年 11 月	いわき市

## 『学際日本研究』第1号

藤原菜穂子	行きなさい——行って水を汲みなさい	思潮社	2014年9月	不明
藤島昌治	仮設にて——福島はもはや「フクシマ」になった	遊行社	2014年9月	南相馬市小高→ 東白川郡塙町
藤島昌治 写真:菊池和子	フクシマ漂流——東日本大震災・福島第一 原子力発電所事故から4年目の福島に行く	遊行社	2015年3月	
藤島昌治 写真:菊池和子	フクシマ無念——ふる里追われて5年 2016.4.1 避難解除の南相馬市小高区に行く	遊行社	2016年3月	
藤島昌治 写真:菊池和子	長き不在——フクシマを生きる	遊行社	2016年3月	
藤島昌治	色のない街——フクシマからあなたへ	遊行社	2019年12月	
前田新	一粒の砂——フクシマから世界に	土曜美術社出版販売	2012年8月	大沼郡会津美里町
前田新	無告の人	コールサック社	2015年10月	
みうらひろこ	渚の午後——ふくしま浜通りから	コールサック社	2015年9月	浪江町→相馬市
みうらひろこ	ふらこの涙——九年目のふくしま浜通り	コールサック社	2020年3月	
室井大和	迎え火	書肆青樹社	2013年7月	白河市
室井大和	夜明け	土曜美術社出版販売	2016年6月	
室井大和	雪ほたる	土曜美術社出版販売	2018年7月	
若松丈太郎 アーサー・ ピナード(英訳)	ひとのあかし	清流出版	2012年1月	南相馬市
若松丈太郎	福島核災棄民——町がメルトダウンしてしまった	コールサック社	2012年12月	
若松丈太郎	わが大地よ、ああ	土曜美術社出版販売	2014年12月	
若松丈太郎	若松丈太郎詩選集130篇	コールサック社	2014年3月	
若松丈太郎	十歳の夏まで戦争だった	コールサック社	2017年8月	
若松丈太郎	東俘の叛逆	コールサック社	2021年3月	
和合亮一	詩の礫	徳間書店	2011年6月	福島市
和合亮一	詩ノ黙礼	新潮社	2011年6月	
和合亮一	詩の邂逅	朝日新聞出版	2011年6月	
和合亮一	ふたたびの春に	祥伝社	2012年3月	
和合亮一 写真:佐藤秀昭	私とあなたここに生まれて	明石書店	2012年3月	
和合亮一	詩の礫 起承転転	徳間書店	2013年3月	
和合亮一	廃炉詩篇	思潮社	2013年6月	
和合亮一	木にたずねよ	明石書店	2015年4月	
和合亮一	昨日ヨリモ優シクナリタイ	徳間書店	2016年3月	
和合亮一	和合亮一詩集	思潮社	2018年8月	
和合亮一	続・和合亮一詩集	思潮社	2018年8月	
和合亮一	QQQ	思潮社	2018年11月	
和合亮一 写真:佐々木隆	十萬光年の詩	佼成出版社	2020年3月	
和合亮一	未来タル 詩の礫 十年記	徳間書店	2021年2月	
和合亮一	Transit	ナナロク社	2021年3月	

## 【欧文要旨】

### Literary Studies after the Great East Japan Earthquake and the Words of Fukushima Poems: Saitō Kazuko, Nemoto Masayuki and Miura Hiroko, Poets who ‘Lost’ their Hometowns

KASHIMA Masahiro

The purpose of this paper is to emphasize the necessity of studying Fukushima-based poets, a topic which has not been dealt with in post 3.11 literary studies. After the triple disaster, the field focused essentially on “literature” published in Tokyo, excluding the ideas of those authors living in the “affected areas.” In this paper, I will thus analyze the expressions of those living in Fukushima by focusing on the work of three authors, Saitō Kazuko, Nemoto Masayuki, and Miura Hiroko. These poets were forced out of their hometowns due to evacuation orders from the Japanese government. Saitō’s poems show that losing one’s hometown is losing the spirit of the land. The poems by Nemoto and Miura express the feelings of those who used to live in a “hometown,” and which cannot be recovered through the simple dichotomy put forward by the anti-nuclear as well as other political movements. Finally, based on the analysis of the poems mentioned above, I described the necessity of carefully rescuing the thoughts of residents, and listed 29 poems by 71 poets residing in Fukushima.

【キーワード】 東日本大震災、原発事故、福島の人、  
震災後の文学研究、和合亮一